

竹簡について

馬場 基

- I. はじめに
- II. 中国の竹簡利用
- III. 韓国の竹簡
- IV. 東アジアの「竹簡」
- V. おわりに

要 旨 日本古代には、木に文字を書いた「木簡」は多く出土するものの、竹に文字を書いた「竹簡」は出土例がない。この点の理由・意義を、日本の古代木簡を、東アジアの簡牘、あるいは文字文化史のなかに位置づけることを通じてあきらかにすることを最終的な目的とする。

中国漢代における竹簡の利用状況を整理すると、以下のような特徴が見出せる。書写材料として、帛（絹布）・竹・木という三種類が存在していた。これらは相互に互換性を持ちつつも、役割分担をしていた。このなかで竹は、「冊書」として用いられることが多い。冊書は、帛よりは格としては落ちるものの、典籍など重要な場面で用いられた。一方木は、立体的な形状での利用や、幅の広い牘としての利用など、その加工性の高さを生かした利用方法が特徴的である。

次に、中世韓国の竹簡について検討する。中世韓国竹簡を加工方法・加工形状・用途などに注目して観察すると、基本的に単独簡で用いられる荷札であり、加工は概して粗雑である点が指摘できる。相伴している木簡と形状や加工にも大きな違いは見出せない。これらの状況から、竹は木の代用品として付札作成に用いられた、と判断できる。これらは、漢代での竹簡利用とは大きく異なる。つまり、中世韓国の竹簡は、中国古代の竹簡の系譜を引く竹の利用方法ではない。

楽浪郡・帯方郡では漢の簡牘利用がおこなわれており、竹を用いて冊書を作成する文字文化は、朝鮮半島・日本列島に、部分的に伝来することはあったかもしれない。だが、広汎に展開することはなかった。また、中世韓国木簡の加工方法などは新羅木簡との共通性が見出され、中世韓国木簡・竹簡は、新羅木簡の系譜を強く引くことが指摘できる。

キーワード 木簡 竹簡 東アジア文字文化

I. はじめに

日本古代には、木に文字を書いた「木簡」は多く出土するものの、竹に文字を書いた「竹簡」は出土例がない¹。

竹は木に比べて、土中で失われやすいと想定される。こうした点から考えれば、古代社会には竹簡も存在していたものの、土中で失われた結果、今日出土しない、という事態も想定できるかもしれない。しかしながら、日本古代社会では、竹は利用されており、竹材・竹製品も出土している²。竹材・竹製品が出土しているのに、竹簡の出土が知られないという点から考えると、やはり竹を書写媒体として用いることは、少なくとも広汎にはおこなわれていなかった、と考えられる。

また、木簡を連ねて巻物にした事例も知られない。日本古代木簡の出土点数が30万点に及ぼうとする状況で、事例が知られないという点からすれば、日本古代には編綴も広汎にはおこなわれなかったと考えられる。

竹簡にせよ編綴にせよ、中国で木簡の利用が隆盛を極めた漢代には、非常に多く存在したものである。こうした漢代以来の中国の文字文化を継受した筭の日本古代において、なぜ竹簡は乏しく、編綴は広汎にはおこなわれなかったのだろうか。

この課題を考える上で、朝鮮半島での竹簡の利用状況をさぐることは、大きな意義があると考えられる。本稿では、韓国での竹簡利用について検討し、日本古代で竹簡が見当たらない理由について、東アジア的視点から考えてみたいと思う。

II. 中国の竹簡利用

まず最初に、中国における竹簡の様相と特徴を整理しておきたい³。

秦・漢代中国では、竹簡は広く利用されていた。同時に、漢代には竹簡以外に、木簡や絹布＝帛書も用いられた。そして重要な点は、これらの帛・竹・木は、その特性を生かしながら使い分けられていた、と考えられることである。

使い分けの様子を確認していこう。帛書は、絹の希少性と「布」という面の広さを生かした利用がなされた。高級な書写材料として、重要な典籍などの書写に用いられるほか、上下・左右に大きく広い書写面を必要とする場合＝絵や図をとともう場合に用いられた。帛書は高価であり、かつ書き直しが困難である。日常的な書類やメモの作成ではなく、情報としては固定・安定し、かつその価値が高いと判断された内容が記載された。『黄帝内経』などを含む馬王堆帛書が、典型的な事例ということができよう。

一方竹は、縦方向に強く繊維が通っている。このことから、縦に細く加工しやすく、幅広い平面には加工しにくい。また、細く加工した場合にも、繊維が強靱なので、しなやか

で折れにくい。この特性を生かし、1行ずつ書かれる、細い「簡」として用いられた事例が圧倒的に多い。この簡は単独で用いられるよりも、ほかの簡と綴られて＝編綴されて用いられる。いわゆる「冊書」である。冊書は、帳簿など様々な行政文書に用いられたほか、法律や典籍の書写にも広く用いられた。後述のように、木を素材として簡を作成する事例も多く存在するが、細く割裂する加工の容易さや、またそれぞれの簡が束ねられた際の丈夫さ－編綴に用いられる紐に負けない強さ－の観点からも、竹は冊書にもっとも適した素材と評価することができる。冊書は典籍や帳簿に用いられる。典籍に用いられるという点では、帛書には劣るものの、相応に格式の高い内容が書写されるべき媒体だったと評価される。

木簡は、竹よりも多様な環境下で入手でき、様々な形に加工しやすい。西域などの竹の生育しないような環境においては、竹同様に細く加工されて、簡として編綴されて用いられた事例が知られる。この場合、書写内容も法律や典籍、帳簿など、竹簡を用いた冊書と類似する。一方、幅広の材に加工されて、複数行書かれて一枚（単独）で利用されること



第1図 漢代木簡の多様な形態の事例（台湾中央研究院藏居延漢簡）

上段：柵書・竹の代用として木を利用
下段左：検・封泥のための加工をとまなう 下段右：樹・付札

も、竹の場合よりも広汎に確認できる。さらに、様々な形状に加工されて利用されていた。例えば「検」は封泥を施すための加工をとめない、文書に封をするためのものであった。荷物に取り付ける付札は「楲」である。「楲」は、上部に穿孔されてそこに紐を通してくりつけられていた。

帛・竹・木の利用は、相互に共通する部分もある一方、それぞれの素材の特徴にあわせた使い分けも存在していた。広く平坦で均質な書写面を確保するという点では、帛がもっとも優れており、その次が竹簡を用いた冊書、木簡を用いた冊書、単独簡、という順になる。入手の容易さ、という点では、木がもっとも容易で、次が竹、帛、とみられる。多様な形状を作り出し、文字記載以外の機能や情報を組み合わせるという点では、木が圧倒的に優位である。

竹と木を比べると、竹は簡として用いられ、編綴される利用法が圧倒的に多いのに対し、木は簡として編綴される場合以外に、多様な形状に加工できる特徴を生かして様々な利用された。用途が典籍や文書を書写する簡にほぼ限定される竹と比べ、書写媒体としての木の用途は非常に広汎である。簡としての木の利用は「竹の代用品」にすら思われる。

このように、帛・竹・木の三つの書写媒体は、相互に互換性を有する部分がありつつも、相当程度に使い分けられていた点を確認しておきたい。

Ⅲ. 韓国の竹簡

さて、朝鮮半島では楽浪郡時代の漢簡として竹簡が出土している一方、三国時代以降においては、現在のところ竹簡の出土は確認できていない。一方、泰安郡馬島沈船などで中世の竹簡が出土している。つまり、中世の朝鮮半島では竹簡が利用されていた。このように、現在、漢代の朝鮮半島には竹簡が存在しているが、三国時代以降には竹簡は確認できない一方、中世の朝鮮半島には竹簡が存在している。このことから想定される経緯は、

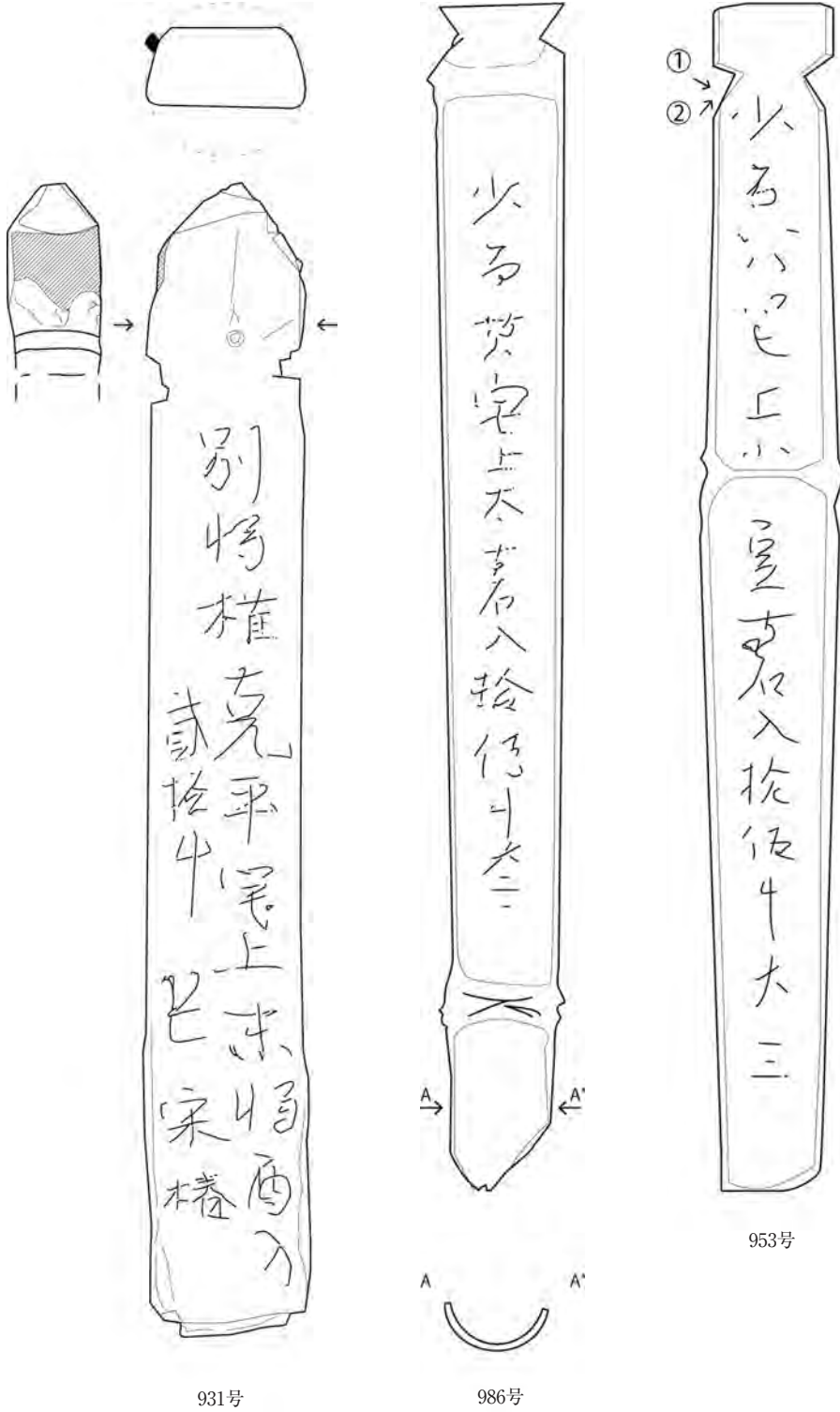
①三国時代以降の古代朝鮮半島でも竹簡が使われていたが、土中環境などにより失われて発見されていない。

②三国時代以降の古代朝鮮半島では竹簡は利用されていなかったが、中世に使われるようになった。

という二つであろう。

さて、馬島出土竹簡について、国立海洋博物館において詳細に実見・観察する機会を得た⁴。まず、国立海洋博物館での観察所見を簡単に提示したい。多くの木簡・竹簡の実見の機会を得た。以下、記録を作成した3点(931号・953号・986号)について所見を述べる。番号は、実見した際に添えられていた固有番号である。

931号 木簡。縦29 cm、横3 cm。「別将権克平」の末醬などを入れた容器の付札である。



第2図 馬島出土中世韓国木簡・竹簡

非常に分厚い。文字を書写していない左右側面には樹皮が残る。木簡の断面に木の芯が確認できる。上部表面には、そこから枝が生え出していた痕跡がある。断面の形状や、芯の存在などから考えると、棒状の木材を用い、書写面の平坦面を削って作成したものとみられる。いわゆる「有髓」タイプの木簡と判断される。

上端は角錐状に加工している。一方、下端は四周から切り込みを入れた後に切り折ったものとみられる。上部に、えぐり取ったような加工痕跡をともなう、切り込みを有する。

材の使い方や加工方法の点で、新羅の城山山城出土木簡に共通点を見出すことができる⁵。新羅木簡の「伝統」を継承する木簡、ということができるだろう。

953号 竹簡。縦34.7 cm、横2.7 cm。一部判読できていないが小豆の付札である。

竹を1/4に割り、竹の内面側に文字を記す。筆写用の平坦面を作り出す加工は施していない。また、割った面について、明瞭な面取りなどの痕跡も確認できなかった。

上下のほぼ中央付近に節がある。1/4に割っているため、本来、節部分は90°の角をもって飛び出すはずであるが、両側の竹のR内に収まる程度に飛び出しを削り取っている。ただし、R内部に含まれる部分までは削っておらず、完全には除去していない。

上部に切り込みを施す。

必要事項を記載し、荷物に括り付けるという用途に対して、実用上必要最低限の加工を施したものと評価することができるだろう。

986号 竹簡。縦36 cm、横2.5 cm。穀物（米か）の付札とみられる。

竹を半裁し、内面に文字を記す。竹は、枝が生え出ている部分の断面は円にならず、枝に応じて一部円の内側に入り込み、部分的に平面を有するような断面となる。986号竹簡は、この枝の影響によって、断面がRとなっていない部分を筆写部分にあてている。半裁のため、1/4に割裂した953号竹簡よりもRがきつく、本来であれば筆写が難しくなるが、こうした竹の形状を用いることで筆写面を確保している。

上下に節がある。節は特に加工せず、そのままになっている。953号竹簡と比べると、節がR部分から飛び出すことがないことから、加工する必要がなかったと判断される。

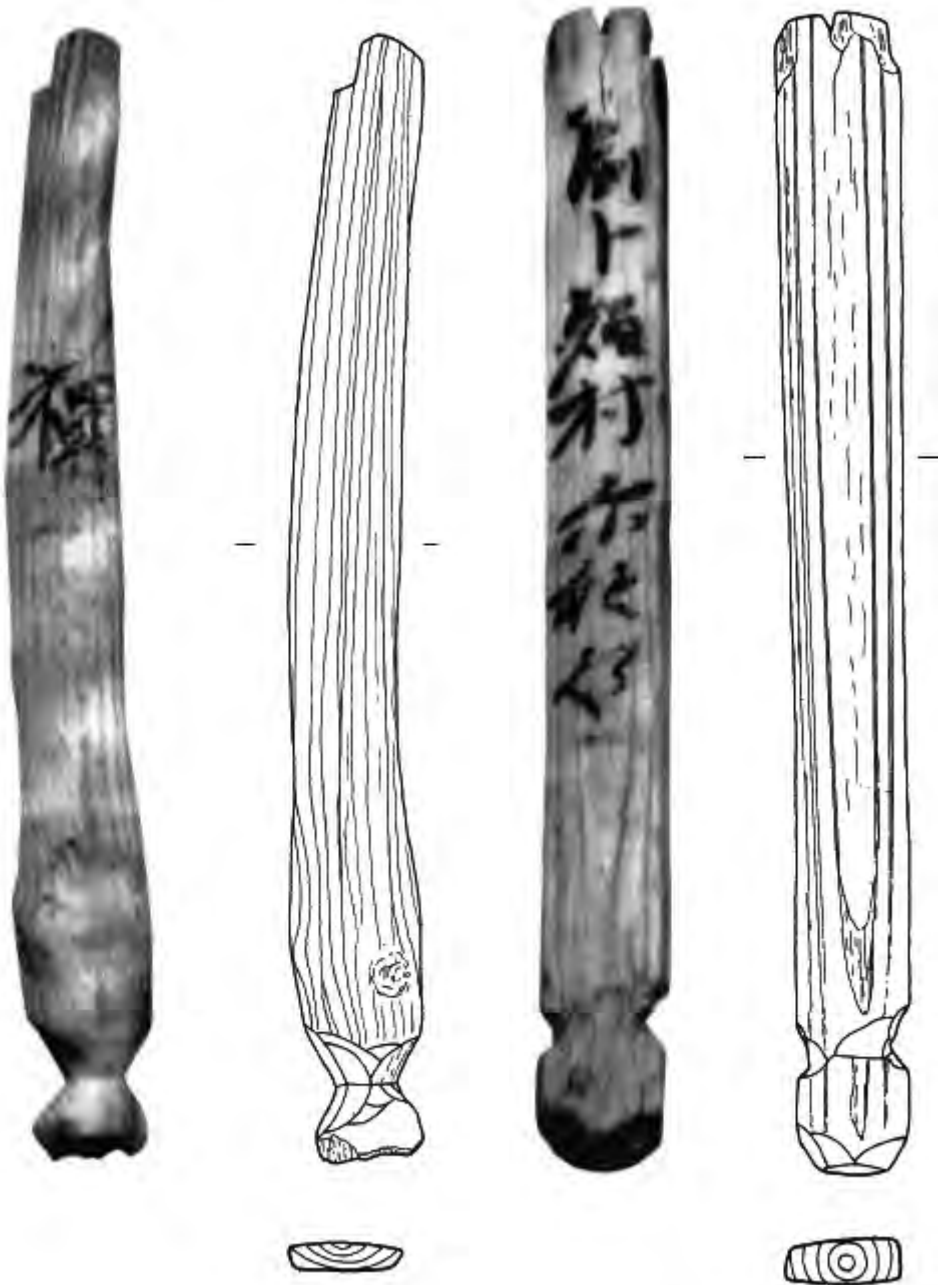
上部の節の、上側に切り込みを施す。また下の節より下で、左右から削り込んで尖らせる。これは、上下の節の間＝枝の影響で平面がある部分を筆写面として確保し、その上下側＝内側に強いRが存在する部分は荷物への装着用の部分とするという、材の形状にあわせた利用方法とみることができる。

実用上必要最低限の加工にとどまる、という点は、953号竹簡と共通する。

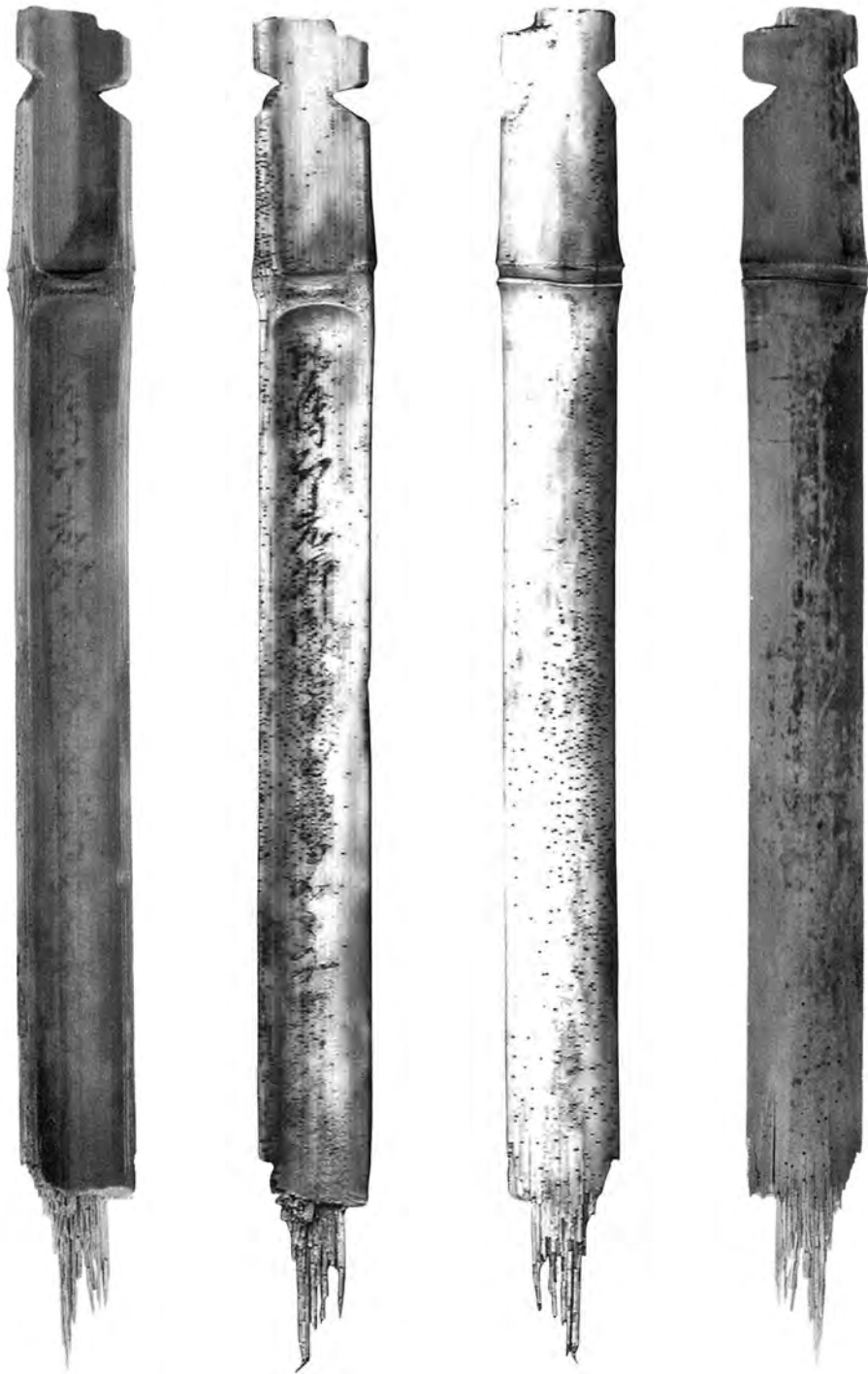
以上の観察を整理すると、次の特徴が指摘できるとと思われる。

A 木簡の加工では、古代以来の朝鮮半島の特徴が引き継がれている。

B 竹簡の加工では、適当な長さに切断した後、1/2・1/4に割って利用する。



第3図 新羅木簡の例 (『韓國의 古代木簡』30後面・40前面) 3 : 4



第4図 泰安出土竹簡の事例1 (국립해양문화재연구소 『태안마도 2호선』, 2011年, 0526-L 5 죽찰) 3 : 5



第5図 泰安出土竹簡の事例2 (국립해양문화재연구소 『태안마도 2호선』, 2011年、0606-H 4 죽찰) 3 : 5

- C 節はあまり丁寧に除去しない。
- D 竹筒の内側に文字を書くことが多い。
- E 平面形状や大きさは木筒と竹筒で類似する。
- F 単独で利用される付札である。

詳細な観察および記録を作成したものは上記の3点のみであるが、これらの傾向は記録を作成していないほかの竹・木筒にも共通する。実見した範囲において、上記特徴は沈船出土中世韓国木筒の特徴だと判断される。

そこで、この観察知見をもとに、ほかの事例について写真で観察をおこなってみた。泰安馬島2号船の報告書の写真を観察し、整理したのが第1表である。竹筒は竹を縦方向に「割って」作成される。半裁しただけのものもあるが、多くは1/4に割っているとみられる。次に、節は積極的には除去されない。1/4に割ると、節の先端が尖るため、その部分を除去する程度の加工であり、割った内側全体を平滑にするための節の除去は確認できなかった。竹の外側は特に加工を施さず、自然の状態のままとみられる。平面形状は竹筒上端部分に切り込みを入れる、日本でいう03型式系のものが多い。

文字は竹の内面に記載する。内面も、上述のように節さえ積極的に除去していないこと

第1表 泰安馬島2号船出土竹筒の特徴

番号	書写面	割数	節数	切り込み	破損	備考
2	内	4	2	下	上少し	
4	内	4	1	上	下	
5	内	4	1	不明	上下	
6	内	4	1	不明	上下	
7	内	4	1	上		
9	内	4	1	上		
10	内	4	1	上	下	
11	内	2	0	上	下	
12	内	4	1	上		
13	内	4	1	上	下	
14	内	4	1	上		
15	内	4	1	上	下	
19	外	4	1	上		節の上にも書く
20	外	4	1	上		節の上にも書く
22	内	4	1	上		
24	内	4	1	上		
29	内外	4	1	無		
30	内	4	2	上		
36	内	不明	1	上	半裁	
37	内	4	0	上		
40	内	4	1	不明	上下	
46	内	4	2	上		

から考えても、特段の加工は施していないものとみられる。また半裁のみで文字を記す竹簡のなかには、枝別れ部分との関係で竹の内面に平坦部分が存在するものが多い。

以上から、B～Fの様相は共通して見出すことができた。

Bの特徴を今少し詳細に検討すると、通常は半裁のみでは曲面が多く書きにくいいため、1/4まで割り裂いて文字を記したが、枝分かれしている場合はこうした平坦面があったため、半裁のみで文字を記載したようにも判断される。B・Cをあわせてみると、要するに比較的加工が粗雑だ、ということになるだろう。またEの点からみると木簡と竹簡に互換性があり、Fの点からみると単独簡として利用されたことが指摘できる。

さて、これらの特徴は、先に確認した中国漢代の竹簡とは大きく異なる。上記Eの特徴のように、加工の荒さや物品に装着する際の紐の使い方、形状などからは、中世韓国の付札木簡、あるいは古代の韓国・日本の付札木簡との共通点が多く見出されるのである。

こうした点から、中世韓国の竹簡は、中国古代での竹簡の利用方法を継承したものではないと考えるのが妥当である。楽浪郡がもたらした、漢代の竹簡を用いる文化が連綿と継承されたのではなく、一度断絶した後、古代の韓国や日本では「木」を利用して作成された付札木簡の、木を竹で「代用」したのものとして中世韓国の竹簡は新たに生み出されたとみるべきであろう。

そして中世に木の代用として竹を利用する、という方法が新たに生み出されたとすると、「竹に文字を書く」という文化は三国時代の朝鮮半島には存在しなかった、と考えることができる。



第6図 竹簡殺青の様子（中国・簡牘博物館展示より）

IV. 東アジアの「竹簡」

翻って、秦・漢代の竹簡の主たる利用場面を考えると、編綴される文書や典籍としての利用が主流であった。こうした利用方法は、漢代末期・晋代以降、紙に置き換えられていく。紙は当初、帛の代用品として用いられたとされる。その後紙の書写媒体としての用途・利用場面が広がり、竹簡・木簡とも置き換わっていった。一方、木簡の持つ多様な形状の世界は、容易には紙に置き換えることはできないと思われ、編綴「簡」の消滅に比べるには遅れるであろうことは、想像に難くない。

さて、日本古代では「紙木併用」ともいわれるように、紙と木簡がどちらも用いられた。ここでの紙と木の関係・使い分けの理由は、紙・木の特性、書写環境の特徴（紙が入手しやすいか、木が入手しやすいか、など）などの要素が絡み合ったものである。こうした日本の文字文化が、どのような起源と来歴を持つのかについて、私案を提示した⁶。簡単に述べると、中国晋代から南北朝期の南朝の文字文化が朝鮮半島を経由して日本列島にもたらされたもので、特に百済滅亡による遺民の渡来が大きな意義を持つ、という見通しである。

この見通しに立つと、日本の紙木併用の背景にある文字文化は、晋代～南北朝期南朝の文字文化である。ちょうど紙が普及し、典籍などの書写媒体が簡牘から紙に切り替わった頃に該当する。細く丁寧に加工した竹簡を編綴して書物にする、という文化が失われ、紙の巻物と単独簡＝おそらくは木簡が、併用されるという文字文化環境だった。中国南朝地域は、確かに竹の産地であるが、同時に非常に森林資源に恵まれた地域でもあった。豊かな森林資源を潤沢に（時には使い捨てたり、多様な形状に加工したりしながら）用いる木簡文化ははぐくまれていた、と考えたい。

さて、楽浪郡には存在していた、竹簡も含む漢代の文字文化が、変容しながら継承されていたのか、断絶していたのかは現状では断定しがたい。ただ、少なくとも朝鮮半島南半分－漢江よりも南－で、連続的な文字使用の痕跡が十分に把握できない状況から考えるならば、一定程度の断絶を想定するほうが、妥当ではないかと思われる。

また、「竹に文字を書く」という方法が三国時代の朝鮮半島に見当たらないことも、断絶の想定を後押しする。以上から、韓国古代木簡は、楽浪郡・帯方郡の直接的な影響よりも、その後の国家形成を通じて中国南朝から受けた可能性が高いと考えられる。

ただし、帯方郡の滅亡時期と、紙の普及時期は必ずしもかけ離れてはいない。楽浪郡・帯方郡の文化的蓄積があり、さらにその後新しい書写技術が伝来、あるいは発達したという可能性も、特に高句麗では強く存在するようにも思われる。今後の調査の進展が期待される。

V. おわりに

最後に2点ほど、本稿では考察・論証できなかった点について、見通しを示しておきたい。

一つは、新安沈船木簡との比較である。新安沈船木簡は、出土地は韓国であるものの、その内容・来歴から日本中世木簡である。中世の日韓木簡の比較が可能になる素材だといえる。今回、詳細な観察やデータ作成をおこなっていないが、写真などを通じての「印象」としては、平面（板材）を指向する加工や切り込みの施し方など、多くの点で泰安沈船出土の木簡・竹簡とは異なる傾向があるように感じられる。これも「印象」の域を出ていないが、泰安沈船の木簡・竹簡は新羅木簡との類似性や系譜が強く感じられ、新安沈船の木簡は日本古代木簡との類似性が強く感じられる。日韓の木簡文化・文字文化の「分岐点」が、日本古代木簡、あるいは日本木簡の祖型といえる百済木簡と、新羅木簡の差異にあるのではないか、という見通しを指摘できるだろう。

次に、なぜ韓国で「竹簡」が復活したのかという点である。朝鮮半島（特に百済）に伝わった紙木併用時代の南朝系の木簡は、豊かな森林資源を背景にするものだったと思われる。一方、古代韓国木簡をみると枝状の材を用いるなど、必ずしも「豊かな森林資源をふんだんに使った」とはいいがたいように感じられる。一方、日本の木簡は木の無駄遣いと言いたくなるほど、木材を使っており、この背景には日本列島の森林資源が存在すると思われる。こうした森林資源の差が、「竹」という素材を積極的に「代用」したかどうか、につながったのではないかと、思う。

ちなみに、平城宮の発掘調査で測量基準点の周囲を保護するために打ち込まれる杭は木製であるが、訪問した慶州月城発掘調査現場で用いられていたのは、竹材であった。

註

- 1 竹製品に墨痕を有する事例などは除いている。
- 2 出土竹製品については、近年研究が進んでいる。浦 蓉子「平城宮・京出土の植物質遺物」『奈良文化財研究所紀要2018』奈良文化財研究所、2018年など。
- 3 中国簡牘については、富谷 至『文書行政の漢帝国』名古屋大学出版会、2010年。横田恭三『中国古代簡牘のすべて』二玄社、2012年ほか参照。
- 4 日韓共同研究での調査。調査にあたっては、李恩碩先生をはじめとする韓国側からの多くの配慮を賜った。記して感謝の意を表する。
- 5 『韓國의 古代木簡』国立昌原文化財研究所、2004年ほか。
- 6 拙稿「書写技術の伝播と日本文字文化」（馬場 基『日本古代木簡論』吉川弘文館、2018年。初出2014年）、および口頭報告「東アジア文字文化の中の韓国木簡」（『韓国木簡と日本木簡との対話－韓国木簡研究20年』2019年1月19日・早稲田大学）、口頭報告「日本木簡の研究資源化的新展開（日本木簡の研究資源化的新展開）（中文）」（首屆中日韓出土簡牘研究國際論壇、2019年、中国北京市）。

죽간에 대하여

馬場 基 (바바 하지메)

요 지 일본 고대에는 나무에 문자를 쓴 ‘목간’은 많이 출토되지만, 대나무에 문자를 쓴 ‘죽간’의 출토 사례는 없다. 이와 같은 이유와 의의에 대하여 일본 고대 목간을 동아시아의 간독(簡牘) 혹은 문자문화사 안에 자리매김하여 밝히는 것을 최종 목적으로 한다.

중국 한대의 죽간 이용 상황을 정리하면 다음과 같은 특징을 알 수 있다. 서사(書寫) 재료로는 비단, 대나무, 나무의 3종류가 존재하였다. 이들은 서로 호환성을 가지면서도 역할 분담을 하였다. 이 중에서 대나무는 ‘책서(冊書)’로 사용된 적이 많았다. 책서는 비단보다는 격이 떨어지나 전적(典籍) 등 중요한 문서에서 사용되었다. 한편 나무는 입체적인 형태로 이용되거나 폭넓은 서찰로 이용되는 등 높은 가공성을 활용했다는 방법적 특징이 있다.

다음으로 중세 한국의 죽간에 대해서 검토하였다. 중세 한국의 죽간을 가공방법, 가공형태, 용도 등에 주목해서 관찰하면, 기본적으로 단독간(單獨簡)으로 이용되는 꼬리표(荷札)이며, 가공은 대개 조잡하다는 점을 지적할 수 있다. 함께 출토된 목간의 형태와 가공에도 큰 차이는 찾아볼 수 없다. 이러한 상황에서 대나무는 나무의 대용품으로서 부찰(付札) 작성에 사용되었다고 판단된다. 이들은 중국 한대의 죽간 이용과는 크게 다르다. 즉 중세 한국의 죽간은 중국 고대 죽간의 계보를 잇는 대나무의 이용 방법이 아니다.

낙랑군 및 대방군에서는 한나라의 간독(簡牘)이 이용되고 있으며, 대나무를 사용하여 책서를 작성하는 문자문화는 한반도와 일본열도에 부분적으로 전파되었을 수도 있으나, 광범위하게 전개되지는 않았다. 또한 중세 한국 목간의 가공방법 등은 신라 목간과 공통성이 찾아볼 수 있으며, 중세 한국 목간·죽간은 신라 목간의 계보를 강하게 잇고 있다고 할 수 있다.

주제어 : 목간, 죽간, 동아시아 문자문화

On the bamboo tablets

Hajime Baba

Abstracts: Contrary to the fact that no bamboo writing tablets have been excavated in ancient Japan or Korea, there are later period examples from Medieval Korea. The question we ask here is: Were there bamboo tablets in ancient Korea and Japan? This paper aims to examine documentation systems in ancient China and compare them with the wooden and bamboo writing tablets found in Korea.

Firstly, documentation in the Chinese Han period (202 BCE to 220 CE) were threefold and included silk, bamboo, and wood. Each type played different roles. Bamboo was mainly used for slip booklets bound by connecting pieces, and used for important scenes such as official books—although, it was considered to be less formal than silk documents. Woods were used as a wide tally, making use of its workability.

Secondly, we observed the processing methods, shapes and use of Korean bamboo tablets. They were mainly used in a single portion and were roughly processed—which is quite similar to contemporary wooden tablets.

Thus, we conclude that the bamboo tablets in Silla inherited its characteristics from ancient Korean wooden tablets, rather than from ancient China. Consequently, there is no reason to assume a wide use of bamboo tablets in either ancient Korea or Japan. We should discuss East Asian ancient literature on the premise that bamboo tablets were absent in these countries.

Keywords: Wooden tablet, Bamboo tablet, East Asian documentation culture